

# かけはし

発行：峡南教育事務所地域教育支援担当

所在地：南巨摩郡富士川町鯉沢 771-2

TEL：0556-22-8154

FAX：0556-22-8144

HPでもご覧になれます URL：<http://www.pref.yamanashi.jp/kyoiku-mk/index.htm>



## 峡南地域教育推進連絡協議会・峡南教育事務所 主催 平成25年度 峡南地域教育フォーラム開催



峡南地域教育推進連絡協議会と峡南教育事務所が主催する平成25年度の「峡南地域教育フォーラム」が、8月27日に身延町総合文化会館において開催され、地推教関係者や地域の教職員、保護者、町関係者など127人が参加しました。



佐川二亮氏

今年のテーマは、「家読(うちどく)」。近年、読書をめぐっては、小中学生の読書離れに一定の歯止めがかかっているという調査結果※1や、学校での「朝読(あさどく)」が様々な効果を上げているという報道がなされています。そして、山梨県教育委員会が昨年度から進めている「しなやかな心の育成プロジェクト」においても、読書の効用をふまえた運動が提唱されており、これが「家読」です。

今回のフォーラムでは、『「家読」で家族の絆を深めよう!!』のテーマのもと、家読運動を最初に提唱し、現在「家読推進プロジェクト※2」代表をしている佐川二亮氏による「家族の絆を深める“家読(うちどく)”で読みニケーション」と題する講演と、埼玉県三郷市教育委員会による「読書で育む家族の絆」という実践発表が行われました。

かつて「朝読」の効用にいち早く注目し推進運動の事務局長も務めた佐川氏は、講演の中でまず、数多い事件報道などから子どもたちを取り巻く生活環境の激変について学校のみならず家庭や地域でも対策を講じる必要があることを述べ、学校の朝読が他者の気持ちの理解を深めることに大きく役立ったことや朝読の内容を話し合う家庭の子どもの生活態度が良くなったという調査結果を紹介し、家庭においても読書活動が大きな成果をあげうることを説明しました。その上で、「朝の読書は、自分自身と対話する個人読書であるが、家読は家族での対話を目的としたコミュニケーション読書である」と

して、家族の心のふれあいを深める新たな読書活動としての「家読」の意義を強調しました。そして、各地への運動展開の経過とそれぞれの地域における多様な取組の工夫を紹介し、事例を交えて家庭・学校・行政・図書館などの役割について述べました。

続く埼玉県三郷市における実践発表では、今年3月に「日本一の読書のまち」を宣言し、読書活動を「市の教育の宝」として位置づけている同市の取組の様子が具体的な事例によって紹介されました。2006(平成18)年の国立教育政策研究所の事業指定を受けたことを契機にスタートした読書活動の取組が、家読運動と出会ったことで大きく充実し、「読書フェスティバル」実施をはじめ、「家読ゆうびんコンクール」開催、「家読の日」設定、読書資料「言葉の力」刊行、さらには学校の読書環境の整備や子ども司書養成制度の展開など多岐にわたって進められることになりました。現在、市政においても読書活動の推進が重要な施策のひとつになっており、家読がその中の重要な役割を果たしていることが強調されました。

講演の最後には山梨県教育庁で家読の推進を担当する社会教育課から、県における取組の説明も行われました。

※1 全国学校図書館協議会「第58回読書調査」の結果より  
※2 HPアドレスは、[uchidoku.com](http://uchidoku.com)(うちどく.com)

## 家読(うちどく)の方法 ひとくちメモ

ところで「家読」を行うための具体的なやり方とはどのようなものでしょう？ 佐川氏の家読推進プロジェクトや県の社会教育課のHPなどから主なものをまとめてみました。

- 📖 家族で「家読の日」を決める。月一回、週一回、曜日や記念日、学校の設定日にあわせる等、どのような形でもOK。家読の日は、ノーテレビ・ノーゲームデーに！
- 📖 家族で同じ本を、それぞれのペースで読む。そして読み語りをしたり内容について語り合ったりする。料理本やハウツー本などは、実際にやってみると楽しさ倍増！
- 📖 家庭文庫や家読の記録、家読カレンダーなどを作ると、家族のかけがえのない財産になること間違いなし！
- 📖 家族の読書体験を語り合う。祖父母や親が昔読んだ本で「人生や考え方が変わった体験」を伝えよう！



※実は家読に決まったやり方はありません。家族一緒に読書を楽しむ時間を作ること、それについて語り合う場を作ることが大事。「我が家流が一番！」なのです。

## 今年の夏休み

たいへん厳しい暑さが続いた今年の夏休み。でも、いつものように暑さに負けずたくさんの行事にたくさんの子どもたちが元気に参加する様子が見られました。峡南地域の夏休みの様子をほんの少しだけ紹介します。

### 南部町 4保育所

## ルール守って、みんなで交通安全を!

南部町の4保育所(栄・睦合・富河・万沢、いずれも新井稔所長)では夏休みを目前にした7月5日、南アルプス市の総合交通センターで、**交通安全教室**を実施しました。所長先生がハンドルを握るバスに乗り、日頃お世話になっている町の交通指導員の稲葉さんとともに南アルプスまでやってきた33人の子どもたちは、到着後さっそく学習ルームに入り、迎えてくれたセンターの先生方の説明を受けました。全員で交通安全ビデオを見て、いくつかの約束を確認した後、学習ルームのシミュレーションやク



イズなどを試す班と、屋外の体験コースで実際の横断歩道や信号について指導を受ける班との2つに分かれて、事故に遭わないためのたくさんのことを学びました。外はあいにくの小雨まじりの天候でしたが、蒸し暑さなんか何のその、子どもたちは元気よく正しい道路の歩き方に取り組んでいました。最後には、一人ひとりの写真入りの修了証をもらい、これから毎日交通安全に気をつけますと、固い約束をしてくれました。



## 青少年育成区民大会の開催

「**地域の子は地域で守り育てる**」、この合い言葉のもと、富士川町では夏休み直前に青少年健全育成の「**区民会議**」が開催されました。7月1日から23日にかけて全部で18の地域で行われたこの会議は、富士川町の地域教育の柱の一つとして続けられているものです。主催は各区の地域の方々。青少年育成富士川町民会議及び各学区の小中学校、そして町の教育委員会が支援する中で、地域住民相互の顔が見える子どもの育成を目ざして開催されています。教職員による学校の様子や育成会の活動状況が報告されるほか、社会教育や地域連携に関するDVDを視聴して意見交換したり、各方面から講師を招いて講演会をしたり、あるいは子どもについて地域で気が付いたことを情報交換するなど、それぞれの区で工夫を凝らして行われています。



教育や地域連携に関するDVDを視聴して意見交換したり、各方面から講師を招いて講演会をしたり、あるいは子どもについて地域で気が付いたことを情報交換するなど、それぞれの区で工夫を凝らして行われています。

### 富士川町内 18 地域

7月10日の大久保地区では、県警の少年対策官を招いてケータイ・スマホやネットと子どもの関わり方について講演があり、また、7月14日の大柵地区では、県の社会教育課から講師を招いて子どもたちの安全確保や健全育成における地域の重要性について考えるとともに、その後のグループディスカッションで、子どもの保護者と、子育てを終えた年長の住民が一緒になって活発な意見交換を行いました。いずれの地域にも共通しているのは、とすると弱まりがちな地域の結びつきの大切さを再認識し、子どもたちを大切にしていこうという、各地域の区民一人ひとりの強い願いです。子どもたちは多くの人々にあたたかく見守られて、のびのび育てられています。



## みんなで通学路を明るくしよう!!

### 市川三郷町 市川小学校・PTA



平成5年に身延線ガード下にある市川小学校の通学路(通称スロープ)に、PTAが中心になって壁画が制作されました。しかし、年月とともに壁画の老朽化が進み、色もあせてきたので、平成23年度に市川地区中央部まちづくり

懇談会が中心となって、「**スロープの壁画**」についての検討会を立ち上げました。会には、当時と現在のPTA役員、学校長、スロープ周辺地区の組長、町職員、まちづくり懇談会会員らが集まり、何回か会議をもち、話し合いを進めてきました。その中で、現在の壁画を修復するのは、困難であるという結論になり、完成からちょうど20年経った本年度、市川小学校の児童・保護者・教職員が中心になり、町にも協力をお願いする中で、新たに壁画づくりに取り組むことになりました。

原画作成、下地準備や下書きなどの工程を経て、7月

28日には、1・5・6年の児童と保護者、教職員、町職員、まちづくり懇談会会員ら約200人が集まり、色塗り作業を行いました。題材は、「くじら雲」、「スイミー」など各学年の教科書に載っている物語の一場面などから選んだそうです。8月3日には、2・3・4年の児童・保護者、教職員が同様の作業を行いました。

また、市川中学校の生徒有志8人や市川高校美術部員10人も地域貢献というかたちで、地域の風景や特産物等を題材に壁画制作に参加し、長さ70mのスロープに8つの作品ができあがりました。景観はとともよくなり、明るくなったスロープは、元気に登下校する子どもたちをこれからも見守り続けます。





## 「夏休み寺子屋教室」今年も開校

「おはようございます!」「おかえり、待ってたよ!」—懐かしい顔ぶれが登園してきました。厳しい暑さの中、7月29日から今年も大野山保育園(沢村和子園長)の恒例の**寺子屋教室**のはじまりです。この日から2週間にわたって清掃活動・自主学習・園児とのふれあい・様々な体験プログラムなど、貴重な経験ができる楽しい日々が繰り広げられました。

平成21年から行われているこの行事は、県の幼児教育振興事業「保幼小連携教育」にもなった事業が現在でも継続されているもので、今年で5回目を数えます。参加者の多くが大野山の卒園児ということもあり、懐かしい保育園の先生方に「おかえり」と迎えられ、思い出に浸る場面もしばしば

です。折り紙教室、紙粘土工作、お楽しみゲーム大会、調理実習と、念入りに準備されたプログラムは、心からわくわくするようなものばかりで、過去の感想文に、「楽しかった」という言葉が1ページに15回も出てくるものもあつたほどです。



## 身延町 大野山保育園

ただ、この行事のねらいは、子どもたちの自主性を尊重して生活体験から多くのことを学んでもらうとともに、園児との異年齢交流を深めること。きちんとした挨拶をはじめ、保育室やトイレの掃除、食事の準備や片づけ、さらには近隣の地域清掃など、あたたかくも厳しいまなざしのもとで毎日を過ごすこととなります。もちろん自主的に学校の勉強もしなければなりません。また、縦割り年齢で班を作って行動したり、園児のお手本になるような振る舞いを心がけたり、責任ある態度が必要なのです。この点で、寺子屋に来てはじめて園児の表情に戻ることもある子どもたちも、いつしかがまん強くなりたくましくなっている姿が目立つようになり、先生方は大きく成長している様子にとてもうれしくなるそうです。子どもたちを支え、その子どもたちから教わることも多い大野山保育園の「夏休み寺子屋教室」。子どもたちにとっても先生方にとっても、来年の夏休みが今から楽しみになっています。



## 身延町教育委員会



## ENGLISH CAMP in MINOBU!

身延町では、「教育のまちづくり」を進めていく一環として、教育委員会を中心に町内の子どもたちの「学ぶ心」の育成を旨とする「**学びの向学館**」に関する事業を平成24年度からはじめています。子どもたちが、主体的に考え行動し思いやりあふれる人間としてたくましく育ってほしい、という願いのもと、学ぶ環境の整備に力を入れて様々な事業展開がなされています。この中で今年度夏休みを利用して実施されたのが、「**イングリッシュキャンプ**」です。町内の希望者に呼びかけて、なかとみ自然の里を会場に小学生が7月22日から、中学生が8月19日から、いずれも1泊2日の日程で集まりました。2日間原則として「英語のみで生活する」というもので、英語の指導に当たったのは町内の学校に勤務するALTの先生方です。英語だけで、という思わず尻込みする日本人は少なくないと思いますが、英語学習の動機づけや異文化交流という観点で、体育館での自己紹介や身体を使ったゲーム、チーム旗づくりや夕食のカレー作り、キャンプファイヤーなど工夫

された楽しいプログラムが展開され、それぞれの子どもたちは英語を身近なものとして感じるきっかけを得られたようでした。特に二日目最後に行われた、キャンプの思い出を英語のスピーチとして発表する場面では、元気に堂々とした姿が見られたそうで、子どもたちの柔軟な力には目を見張るものがあつたとのこと。小学校で英語学習が取り入れられるとともに、国際化が一層進む中で、コミュニケーションツールとしての英語の重要性は強まっていくと考えられます。こうした中で地域の事業として試みられているこの事業は注目される取り組みといえます。



## 地域おこしの企画に取り組む ~三年越しの町おこし~

## 峡南高校情報ビジネス科



峡南高校(矢野博文校長)の情報ビジネス科2年生24人が、夏休みの7月26日に、身延町なかとみ和紙の里で、学校独自の提案企画による**紙漉ランプシェードの作成**を行いました。これは、峡南高校の生徒発案による3年越しの地域おこしの企画が実ったもので、地元の西嶋和紙工業協同組合とキャラクター著作権を持

つ企業を交えた3者の長期にわたった取り組みの成果です。

この春に卒業した峡南高校情報ビジネス科の生徒は、商業の授業を通して地域の産業の活性化に着目。とりわけ伝統と貴重な文化を受け継ぐ名産品である、「西嶋和紙」の商品開発について検討を重ねました。高校生らしいユニークなアイデアで、例えば「習字用紙にキャラクターデザインの透かしを入れれば小学校などで楽しい習字ができるのでは」とか「紙製のコースターに透かし入りのものをつくってみる」といった提案がなされました。しかし実際には、キャラクターの肖像ライセンスや細かなデザインなど多くのハードルが出てきました。

生徒の熱意を携えた教職員と工房担当者、製紙業者の皆さんがキャラクターの著作権者と度重なる交渉を続けた結果、地域活性化を目指す体験工房の企画としてようやく認められることになったのだそうです。紙漉体験の楽しさを味わいながら、先輩から託された企画の実現を目指してきた生徒たちは、実際のビジネスの難しさ、地域の伝統産業が持つ大きな価値やかけがえのなさ、自分たちの社会的役割を実感することの尊さなど多くのことを学ぶことができました。なかとみ和紙の里では、翌7月27日からこのキャラクターを使用した紙漉体験を一般の方を対象に開始しました。ランプシェードの他、凧やうちわ、タペストリーの製作も検討中だそうです。

峡南高校ではこのほか、県男女共同参画推進センター(びゅあ峡南)との共催で、親子木工教室(7月28日)を例年行っていますが、今年度はこれに加えて「親子ものづくり教室・オリジナルコースターを作ろう!」(8月4日)を開催しました。これは錫(スズ)を利用した金属加工によるコースターを作るもので、日頃生徒が学んでいる金属加工技術や知的財産開発事業についての理解を深めるとともに、実際にものづくりの成果を地域に還元することをめざしたものです。どちらも夏休みを利用した大勢の親子連れが参加し、大盛況となりました。

「いじめ」問題から見えるもの ~私たちは「何を」問題にすべきか~

山梨大学教育人間科学部 学校教育講座 准教授 高橋 英児 氏



(3)大人には何ができるのか

①学校・学級という空間を問い直していくこと

◆競争的価値観を問い直す 1995(平成7)年の阪神淡路大震災の直後、被災地の学校現場では注目すべき状況が認められた。それは、「異常事態」が続く中で、不登校の子どもや非行問題ある子どもが「ニコニコしながら」登校していたが、状況が復旧して「正常化」するに従って、彼らは再び学校を休むようになり、「正常になったはずの『普通』の学校が、実は『異常』なのではないか」と感じられるようになったというのである。異常事態の中で登校していた子どもたちは、「生きている」という喜びをお互いに持ち、災害の異常事態に対してボランティア活動などをする中で「自分自身の役割」や「感謝される喜び」を実感し、学力や競争的価値観以外の評価を得てそれぞれの居場所や価値を認められることができたのである。

◆「困った子」は「困っている子」である 大人が見て「困った子」というのは、実はどうしてよいか「困っている子」なのであって、本人の手の届かないところの悩みや困難を抱えていて問題行動に向かっているのではないか。つまり、大人はその子が生きている現実をしっかりと見つめることによって、その子の困難な状況に対する解決の手がかりを得ることができる。限られた価値観にとらわれた今日的な学校の危機管理体制は、われわれに対してそういった個々の子どもの現実に気づく機会を奪っている。

◆地域社会の共同概念の喪失を見直す 学校を取り巻く地域社会でも多様なつながりのある共同体としての世界観が失われている。最近特に「少しでも異なること」への不寛容さが大人の世界でも強まっている。保護者のネットワークの広がりや、問題ある子どもを排除することに作用したり、根拠のない中傷や噂につながったりすることがしばしば見られる。子どもたちに対して表面的な判断を下すことは、学校に限らず家庭や地域にも存在している。

大津いじめ事件では、加害者の情報がインターネット上に氾濫し、これを匿名の第三者による正義の行為とする評価が横行した。しかし、これは前述の学校におけるグループ内いじめの「正義」と同じものである。「正義」の大義をバックに、また相手が抵抗できないことをよいことに追いつめるというのは、まさに「いじめと同じ構造でいじめを問題視する」という点で、社会そのものがいじめの構造に絡め取られており、皮肉を通り越して恐ろしいことですらある。

②自らの関係を作り変える子ども自身の力を育てること

◆関係の再構築と認識・行動の指導 学校において、いじめ問題を丁寧に読み解いていくことは大切であるが、その過程で事件や人物などの事実(事実経過=text)のみならず、いじめの背後にある生活現実等の諸要因(社会的文脈=context)をとらえることがより重要である。そこから学校やクラスでの子どもたちの人間関係や願いなどを知ることが、子どもたちの世界の理解を深めることになる。これは子どもたち自身の価値観の変容を促す契機や、子ども同士が関係を作り直すこと(出会い直し)にもなっていく。

◆癒しの会による気づき 例えばある学校においてなかなかおさまらないいじめグループに対して、被害を受けている子どもたちを集めて語り合う、「癒しの会」を持ったという実践がある。なぜいじめがなくなるのかの問いかけに対し、いじめグループの上にさらに強い力を持った子どもの存在が浮かび上がり、結局いじめグループの子どもも別の場面ではいじめられる被害者となっていたことがわかった。そうすると本当に励ますべきはむしろいじめグループの子どもたちかもしれない、と癒しの会の子どもたち自身が気づいたというのである。これによっていじめグループの解体といじめの解決の糸口がつかめた。固定的な加害者－被害者という関係性をあらためてとらえ直すこと、つまり社会的文脈を読み解くことが、子どもたち自身の気づきの契機や問題解決の契機ともなりうる。

③子どもたちの声を聞くこと

◆子どもは言葉だけで伝えているわけではない 例えば荒れている子どもが「オレのこと見るんじゃねえ」とくっつかかってきたことに対し、その通りにすると次には「オレのこと見捨てるのか」と受け止められることがある。実は最初のセリフは、「オレを見て欲しい」という気持ちの逆のあらわれであった可能性もある。このように子どもの態度や言葉には、実際とは異なるメッセージが込められている場合が少なくない。子どもはたとえ荒れている中でも、正しい道を求めたいというメッセージを発している可能性が常にある。ここに大人のとるべき関わり方のヒントがある。子どもたちの否定的な姿に対して、必ず別の姿が隠れていると信じることで、それを子どもとともに探すこと、その子どもが求める「何か」や「なぜか」を常に考えること、これらができたとき、私たち大人は子どもと新しい関係を築き、問題解決の道筋を発見する可能性が出てくるのである。(以下次号)

県内地域のお知らせ

増穂商業高校 (TEL 0556-22-3185)	学園祭「緑誠祭」(9日「増商デパート」開催) 11/8(金)~9(土)
	いきいきショップ増商(甲州富士川まつり出店) 11/10(日)
市川高校 (TEL 055-272-1161)	授業公開 10/25(金)
	中学校教員対象入試説明会 11/1(金)
峡南高校 (TEL 0556-37-0686)	授業公開 9/5・10・12、10/15(火)・21(月)・22(火)
	学園祭「峡香祭」 10/30(水)~11/1(金)
	生徒会年末行事(正月飾り・餅つき) 12/20(金)
身延高校 (TEL 0556-62-1045)	ライブミュージアム・授業公開 10/16(水)~22(火)
	福祉講演会(公開) 10/23(水)
	小中高一斉ボランティア活動 11/6(水)
身延山高校 (TEL 0556-62-3500)	学校説明会 11/29(金)・12/6(金)・12/26(木)
	学園祭「延山祭」 10/26(土)
わかば支援学校 ふじかわ分校 (TEL 0556-27-0067)	第2回オープンスクール 9/26(木)
	小中学校交流 齧沢中部小 11/29(金)・齧沢中 11/19(火)
	齧沢奉仕活動の会 小学部 10/17(木)・中学部 11/14(木)

編集後記

厳しかった今年の夏も峠を越え、秋の装いがあちこちに見え始めています。苦痛にさえ思われたあの暑さも、いざ終わろうとするとき一抹の寂しさを感じるものです。季節と同じように、大人にとって子どもたちとの関わりも、瞬間に過ぎ去って行くものかもしれません。今日、社会環境の課題が多々あると思いますが、明日を担う子どもたちのために精一杯取り組んでいきたいものです。